

アメリカ史のなかの 2000年人口センサス

---人種・民族・公民権のポリティクス---

山田 満

報告の目的:

- (1) 昨年6月定例研究会で「US 2000年人口センサスの実査過程のポリティクス: 公民権とプライバシーの狭間で」というタイトルで報告を行ったが、センサス評価調査(ACE)が終了し、第一段の調査結果数値がほぼ出そろった現在の段階でUS 2000年人口センサスの評価を行う。
- (2) 今回の人口センサスの最も重要な変更点は、「人種(Race)」調査項目で複数選択回答方式が導入されたことである。複数選択に回答者がどのように反応するか、公式集計が実際にどのように行われ公表されるのか、注目されていたところであるが、第一段の調査結果が出た段階で評論してみる。
- (3) US 2000年人口センサスの調査項目に見られる大きな特徴の一つは、「人種(Race)」と「民族(Ethnic)」という二つの調査項目が互いに独立した質問項目として存在していることである(他の多くの国では「Ethnic Group」を尋ねる質問項目のみ)。なぜ、このようなアノーマリーな事態が生じているのか、を政治学の諸研究に依拠して説明し、批評する。合わせて、アメリカ合衆国の人口センサスにおいて、なぜ「人種」質問項目が存在しなけりばならなかったのか、そして今日もなお年齢や性別と同格の重要な調査項目として存在し続けているのか、を政治学的-歴史的観点から説明する。
- (4) 統計が社会的現実を反映すると共に社会的現実を作り出す装置であることを確認し、統計の政治学的研究の必要性を考える。

報告の段取り:

- (1) 今回の調査は歴史に残る大成功だったのか?
 - *回収率はどうだったか。 *アンダーカウントの評価は。
 - *Referentのない記号ゲーム
- (2) 第一段として公表された公式集計結果を見る。
 - *新聞報道(論評)から *センサス局の公式文書から
- (3) 調査結果数字が本当に意味していることは何か。
 - * Hard Data と Soft Data
 - * Nation と Ethnicity
 - * Race と Ethnic Group
 - * 「人種」「民族」調査項目が如何なる経緯で生まれ、どのように変遷し、今に至っているのか、そして、調査結果はどう使われるのか。
- (4) 終わりに: 人口センサスの政治学

基準文献(論文、及び米国政府関係資料は除く):

- William Alonso and Paul Starr (eds.) The Politics of Numbers, Russell Sage Foundation, New York, 1987.
- Margo J. Anderson, The American Census: A social History, Yale University, New Haven, 1988.
- Harvey Choldin, Looking for The Last Percent, Rutgers U.P., New Brunswick(NJ), 1994.
- D.L. Steffey and N.M. Bradburn (eds.) Counting People in the Information Age, National Academy Press, Washington,D.C., 1994.
- Barbara Everitt Bryant and William Dunn, Moving Power and Money, New Strategist Publications, Ithaca(NY), 1995.
- Margo J. Anderson and Stephen E. Fienberg, Who Counts?: The Politics of Census-Taking in Contemporary America, Russell Sage Foundation, New York,1999.
- Peter Skerry, Counting On The Census?, Brookings Institution press, Washington,D.C., 2000.
- Melissa Nobles, Shades of Citizenship, Stanford U.P.,Stanford,2000.

センサスの結果発表をうけた全米各地の主な新聞の反応

- (1) 10年間の人口増加数は、歴史上、最高を記録する。人口重心は、1990年
ときから 約12.1 miles south and 32.5 miles west に移動。
- (2) ヒスパニック系とアジア系の増加が目立つ。とくにヒスパニック系。
- (3) ヒスパニック系の人口数は、ほぼ黒人系と肩を並べる。西海岸を中心にヒ
スパニック系が黒人系を上回る。全米の各地でヒスパニック系が増加。
- (4) カリフォルニア州では、白人は少数派に転落。
- (5) ニューヨークやシカゴなど一部の大都市部で人口増加に転じる。
- (6) 人種間隔離の度合いについては、黒人については（白人社会との）融合が
進んでいるが、ヒスパニック系は隔離の度合いが高い（だが、それは新規
参入移民グループに共通に見られる傾向）。しかし、黒人についても人種
隔離は依然として続いている。
- (7) アメリカン・インディアンであることは隠すべきことではなくなった。
- (8) 人種複数選択は、公民権的諸施策に影響も。

白石 隆『海の帝国』（吉野作造賞受賞）中公新書刊、2000年、p.p.99-102より

（大英帝国の東南アジア_マレー半島_統治と関連しての発言；なお、白石氏の以
下の発言は特別に新しいものではなく、政治学では「アイデンティティのポリ
ティクス」（カルスタ用語；肯定的に語られることも多い）と呼ばれ、かなり一
般的な考え方である）

「民族のカテゴリーを土台に社会的地図が作成される、それがリヴァイアサンの
力によって社会的現実となる、そしてその結果として本来空っぽであった民族的
カテゴリーが次第に切実な意味をもつようになる、……。こうしたプロセスの出
発点には人口調査があった。リヴァイアサンが自らの支配下にある全ての住民を
数え上げ、分類するという作業である。

シンガポールでは最初の人口調査は1824年に実施された。1.1万人の住民が数えら
れ、これが「マレー人」「中国人」「ヨーロッパ人」「アラブ人」「アルメニア
人」「その他」に分けられた。これがそれ以降の海峡植民地、英領マラヤの人口調
査の原型となった。……人口調査はこうした人たちをきわめて恣意的に分類し
た。……アチェ人、ブギス人、ジャワ人などはすべて「マレー人」賭してまとめら
れ、「マレー人」はマラヤの「原住民」である、というフィクションの下、たとえ
到来したばかりの移民でもマラヤの「土地の子」となった。そしてこれがいまでも
マレーシア政府のプミブトラ（「土地の子」）優先政策を支えるフィクションと
なっている。

英領マラヤの行政がこうしたカテゴリーを土台に組み立てられ、やがて「マレー
人」「中国人」「インド人」などのカテゴリーが物神化されて、……「マレー人」
に分類された者はすべて自分のことを「マレー人」と考えるようになったというこ
とである。……民族は人口調査とリヴァイアサンによって生み出されたのだった。
……そしてこれが新しい政治を生み出した。

その第一は、数の政治である。人口統計によって住民は民族、地域（行政単位）、
所得水準、学歴、年齢など、様々の分類基準によって数えられ分類される。こうし
て「多数派（マジョリティ）」と「少数派（マイノリティ）」が明らかとなった。
……また、人口統計における民族別所得統計、民族別教育統計、民族別労働統計な
どによって、所得、教育、雇用などにおける民族間格差がだれの目にもはっきり見
えるようになった。「華僑」問題はこうして生まれた。

第二に、メスティーソ、混血人が消滅した。物理的に消滅したというのではもちろ
んない。カテゴリーとして消滅した。そしてこれがアイデンティティの政治を生み
出した。……すべての人が極めて恣意的に「マレー人」「中国人」いずれかに分類
される。そういうところではメスティーソに居場所はない。……どこかに同化する
しかない。

こうしてみんな「オランダ人」は「オランダ人」らしく、「中国人」は「中国人」
らしく、そして「マレー人」は「マレー人」らしくなっていった。アイデンティ
ティの政治がはじまった。19世紀末、20世紀はじめ頃からのことである。